
太陽の塔と小さな魔女

神崎 優太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽の塔と小さな魔女

【Nコード】

N0450H

【作者名】

神崎 優太

【あらすじ】

太陽の塔に住む魔女の呪いで、影を奪われてしまった少年、ニム。彼は影を取り返すため、塔に向かいます。そこで彼を待ち構えていたのは……。

「影がない！」

はじめに気づいたのは鍛冶屋の親父さんでした。鍛冶見習いの少年、ニムがふいごを動かす手を止めてふりかえります。

親父さんは、自分とニムの足元を指差しました。二人とも、確かに影がありません。

ニムが慌てて外へ出てみると、村のみんなも影をなくして途方に暮れています。

首をかしげるニムに、親父さんは震える声で言います。

「魔女だ……魔女の呪いだ」

すると、大きな声が空から聞こえました。

「私はコワイコワイ、塔の魔女。影を返して欲しかったら塔までとり返しにおいで！」

村の近くには、昔から太陽の塔と呼ばれる魔女の塔がありました。ニムは影を返してもらうため、勇気を出して塔に向かいます。

塔は岩よりも固い壁と数え切れないほどの窓でできていて、てっぺんは雲の中に隠れて見えませんでした。

「こんにちは」

おそるおそる、小声であいさつをしながら、ニムは入り口の扉をたたきます。すると、ギーッと音をたてて扉が開きました。

「イイツ……イラツシャイマセ」

それは、ブリキで出来た四本腕のロボットでした。背丈はニムの三倍はあり、カタカタと音を立てつつける下あごが少し不気味です。「あのー魔女さんに影を返してもらいに……」

「魔女？　ゴ主人様二向カツテ魔女トハ、ナント失礼ナ子供ダ！　ウガガガッ！」

そついうと突然ロボットは怒りだし、ニムにつかみかかってくる

ではありませんか。

空高く持ち上げられるニム。もうだめだ、そう思った瞬間、ロボットの動きが止まりました。

「やめなさい、アーモンド！」

ロボットが、自分の手で頭をぎりぎり横に回すと、そこに今までとは別な顔が現れました。にっこりとわらったやさしい女性の顔です。

「なんだよシヨコラ、いいところだったのに……。ちえっ」

ロボットの頭の後ろから、さも残念そうに舌打ちをする声が聞こえました。

おもしろいことに、ロボットは前から見ると男性、後ろから見ると女性の形をしています。

「ごめんなさい僕。アーモンドったらいたずらで」

シヨコラがそう言うのと、ごめん、ごめんと笑う声が聞こえます。

ニムは一安心して、シヨコラに自分が塔にきた理由を話しました。

「あの子、そんなことを！ まったく、とっちめてやらなくちゃ！」

ロボットは塔の中を魔女の部屋まで案内してくれました。

複雑に折れ曲がった階段を登ったり下ったりしながら、いくつもの部屋を通りすぎてロボットと少年は一つの扉にたどりつきます。

シヨコラは、入るわよと一声かけて部屋の扉を開きました。

「くっーちまうぞー！」

突然、わし鼻で髪を振り乱した巨大な魔女の顔が扉の向こうから現れました。

ニムは驚いて、声もでません。

だけど、シヨコラは少しも驚かずこういいました。

「メデイあなた、またやったのね？」

すると、ボワンツと音がして魔女が白いけむりに包まれていなくなり、代わりに小さくてかわいらしい女の子がでてきました。女の子の後ろには、丸いかごにつるされて苦しそうに助けを求める村人

たちの影もいます。

「だったらなあに！」

女の子は不似合いなくらい大きなとんがり帽子をかぶっているため、顔が半分隠れてしまっています。それを手にもった大きな杖で押し上げながら、ほおをふうつとふくらませておこった顔をのぞかせます。

「だったら何じゃないでしょう。なんで影をとったりしたの！ 魔法をそんなことに使っちゃいけないってあれほど……」

「うるさいわね！ だったらシヨコラの影もとっちゃうんだから。えい！」

女の子が杖をふるると、ロボットは突然その場にたおれ、代わりに黒い大きな影がぬうーっと立ちあがりました。その影の足元でピラピラのペシャンコになったロボットがのびたり、ねじれたり、ちぢんだり。

「うわー！ いたい、いたいよ！」

「メデイ！ あなた何をしたの？」

アーモンドとシヨコラが苦しそうに叫びます。

「影と体がひっくりかえっちゃった……違う！ 知らない！ 私こんな魔法かけてない！」

えーん、ついにはメデイも泣き出してしまいました。

ふと、ニムは窓から空を見上げます。

「待つててメデイ！ 僕にいい考えがあるよ」

そういうとニムは窓から塔の外へ出て、塔の壁を登りはじめました。何度も何度も足をすべらしながら、それでも必死に登っていきます。

やがて、塔のてっぺんに辿りつきました。そこはもうお月様と同じ高さです。

ニムはお月様をお願いをしました。

「おやすいごようさニム。それに、太陽のやつは前から大嫌いだった

たんだ。あーはっはっ！」

月は大きな声で笑いながら、すーっと太陽に重なりました。すると、どうでしょう。辺りは、たちまちまっくらになり、ロボットの影はすーっと消えてしまいました。

ニムが降りていくと、ロボットはもう元通り元気になっていました。いつの間にかニムにもちゃんと影がついています。

魔法がとけたのです。

「さあメディ。おせつきょうを始めるわよ！」

元気になったシヨコラの横で、メディはしゃがみ込み、また、しくしくと泣き出してしまいました。

「だって、誰も塔に遊びにきてくれないんだもん。お母さんがいなくなつて、ずっと一人きりで……さみしくつて……」

始めは怒っていたシヨコラとアーモンドもどうしたものか困り顔。そのとき、ニムがメディにそつと手を差し出しました。

「一人じゃないよ。僕がいる。シヨコラとアーモンドも」

メディはニムの手をとつて立ちあがり、涙をふきながら、にっこりと微笑みます。そして、肩ごしにふりかえると、ロボットに向かって、べえーつと舌を出しました。

「ちえつ、なんだいあいつばかり……」

それを見たアーモンドが、ぼやきます。

あの子には人間の友達が必要なのだよ、シヨコラはそう心の中でつぶやきました。

メディはそれから毎日いたずらばかりで、シヨコラにしかられっぱなし。

でもニムが遊びにくる今日は、なんだかうれしそうです。

(後書き)

アーモンドとシヨコラのデコボココンビは結構お気に入りです。この二人(一人?)をメインにした続編も書きたいと思っています!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0450h/>

太陽の塔と小さな魔女

2010年10月8日15時59分発行